令和８年度宮崎県農政水産部試験研究評価検討委員会（農産委員会）議事概要

宮崎県では、本県農畜水産業の更なる振興のため「宮崎県農畜水産業試験研究推進構想」に基づき「高度な革新的技術で、生産現場の期待に応える」研究開発等に取り組んでいます。

宮崎県農政水産部試験研究評価検討委員会は、本県農水産業の持続的な発展に貢献できる高度な技術開発を効率的に行うため、各試験場の研究計画及び研究成果等について、有識者等による多角的かつ客観的な評価や意見をいただくことを目的として毎年開催しています。

１　日時・場所

日時：令和８年１０月２６日（月）午後１時３０分～午後３時３０分

場所：宮崎県総合農業試験場　大会議室

２　委員（農産委員会：対象とする分野は、総合農業試験場の試験研究）

小林委員、小森委員、新田委員、竹下委員、田中委員

（欠席　蔵留委員、下永委員、吉元委員）

３　議事概要

⑴ 継続課題について（報告）

「高付加価値化販売に向けた県産農産物の栄養・機能性成分の把握」を含む６９課題について事務局からの報告が行われた。

（主な質疑・意見）

委員から、「ラナンキュラス等の健全メリクロン苗の確保」のうち「かんしょ」において、特定のウイルスについては除去に至っていないことに関し、当該ウイルスの除去はそもそも難しい技術であり、宮崎大学としても一緒に検討できると良いという意見があった。

⑵ 終了課題について（評価）

「本県主力花きにおける革新的技術開発事業」を含む評価対象１０課題について評価された。

A評価（ねらいどおり）７

B評価（継続により成果得られる）２

C評価（ねらいどおりの成果は得られず）０

翌年度評価（栽培期間が年度をまたぐため）１

－（評価対象外（国等外部資金））８

（主な質疑・意見）

委員から、「加工用ホウレンソウでの窒素施肥指針の策定」に関し、都城地域の黒ボク土においては、窒素施肥量を削減しても収量に影響が無いという試験結果について、今後、標準施肥量を変える可能性について質問があった。

これに対し、試験場から、畜産地帯である都城地域では、堆肥の施用により地力窒素が多いと推定されるため、今回の結果を踏まえ、標準施肥量を見直す可能性もある旨の説明があった。

⑶ 令和９年度新規課題について（意見聴取）

「地域の水田農業を進める稲作技術の開発」を含む全６課題について、原案のとおり進めることで同意された。

（主な質疑・意見）

委員から、「いちごの育種効率化に資する食味及び硬度の簡易測定手法の確立」に関し、開発品種の現場普及に向けての工夫についての質問や、いちごは高温の影響により年内出荷が難しくなっており、早期の品種開発が必要である旨の意見があった。

これに対し、試験場から、系統選抜の段階から指導員や生産者等と連携していることや、高温条件下でも安定した生産が可能な品種の開発に取り組むとの説明があった。

また、委員から、「カンキツにおける環境負荷低減栽培技術の確立」に関し、具体的な技術内容について質問があった。

これに対し、試験場から、肥培管理のほか、少量の農薬でも効果が発揮できる樹形を検討し、農薬の散布量を減らすとともに、土着天敵等を活かせる栽培体系などに取り組むとの説明があった。